

特別研修

月例研究会 議事録 (11 月) 2010 年度第 9 回

報告題名 間伐の積極的実行と間伐材の流通普及による林業再生の可能性

—岩手県気仙地域の取り組みを事例に—

報告者 佐々木 龍馬

日時 11月18日 午後3時～

(所属分野) フィールド社会技術学分野

場所 第2講義室

座長 堀

議事録担当者 北村

出席者

長谷部、安江、小山田、国井、米倉、冬木、伊藤、石井、阿部(美)、張、韓、Deffi、スチン、八木、宮本、佐々木(龍)、福田、水木、宮里、渡邊、易、威、王、北村、金(詰)、滝田、覃、中村、堀、山口、林、泉井、Intan、Sudirman、Lies、金(銀)、黄、小原、片山、佐々木(彩)、佐藤(良)、澤田、柴田、渋谷、千葉、藤、八鍬

報告要旨

高度経済成長期以降、木材輸入が加速し、安価な外材が国内需要を主に満たすようになった。次第に国産材の需要が減少し、さらに担い手の離脱等の問題により、国内の林業は衰退の一途をたどっている。結果、日本の木材自給率は20%台まで低下した。また適切な森林の管理が進まない箇所が増加し、各地で土壌や水源の機能の低下が発生し、他産業への影響や災害の増加等につながっている。

森林の管理を行っていく中で重要な作業の一つに間伐が挙げられる。主伐材になり得ない樹木を伐採することにより、主伐材の成長を適度に保つことや、土壌、水源の機能の保全にもつながると考えられている。近年では森林の蓄積も進行しており、一層間伐の必要性も高まっている。しかし間伐材の価格が低いことや、用途、品質の問題から利用の見通しが立たず、間伐だけを行って木材は山に放置する、あるいは間伐すら行わないケースも多い。

今回の報告では、全国と岩手県における森林の伐採量や木材生産のこれまでの動向について整理し、木材生産と間伐材利用の現状を示す。また間伐材を積極的に扱い、生産を川上から川下まで一貫した体制で行っている気仙木材加工協同組合連合会とそこに参加する組合について、設立から現在に至るまでの経緯と、地域内での間伐材の利用について明らかにする。

質疑・応答

安江>厳しいことを言えば、研究の目的、課題がはっきりしていない。流通の問題をしているのか、間伐材のシステム自体をどのように普及するのかについてなのか、どういう視点で見ればよいかわからないので、今の段階でどういう視点での分析を考えているのかを教えてください。

佐々木>テーマを設定するのが遅くなってしまったので、その当りはまだ探っている段階であるが、間伐が上手くできるしくみができることによって、地域の経済が活発になるのではないかと、また事例が全国に広まることによってそうした動きが活発になっていくのではないかと、今回のテーマを設定した。販売するための製品が作られねばならないが、効率よく製品を作るということで、気仙地域の事例があった。事業者の中で一貫して製材を行い全体的には利益があがっていても、中身の企業については実際には利益が上がっているかというところと景気の影響などもあり、そうとは限らない。そういった経営に関しても見ていきたいと思っているが、まだまとめきれず言葉では表しにくい。

安江>要するに日本の林業を変えるにあたって、課題を限定すると、林業経営のところをまずはしっかり改善することで解決の糸口が見つかるのではないかとということですね。

佐々木>はい。

冬木>6枚目のスライドの需要量について、92年からの薪炭材増加の理由は何なのか。

佐々木>詳しくは分析していないが、可能性としては薪ストーブの普及などがあるのではないかと推測している。

冬木>そんなに薪ストーブを使うのか。

佐々木>両角先生の研究を思い出し、そのように推測した。

長谷部>実際に供給する木材に対して、間伐がどれくらい必要なのか。

佐々木>まだデータを集められていないのでこれからしっかり調べたい。

長谷部>そういうデータはあるのか。

佐々木>ありそうというだけではあるが、その当りのデータもとらないといけないと考えている。

需要ではないが、ポテンシャルと言う面を見ると、気仙沼加工連が有している機械が一年間に用いることができるのは、面積でいうと6万haということである。しかし、稼動初期に実際に集まったのはおよそ600ha分だけだったということである。6万haと言えば気仙地域全体で間伐を行ったぐらいであり、それくらいカバーできるポテンシャルは持っているということである。

伊藤>質問と言うよりコメントのようになってしまいが、システムができればよいということは全国各地でなされているが、最終的には売れなければならない。おもしろい取り組みとして、利用する大工さんや地元資本の中小のメーカーさんに間伐材についてよくわかってもらうための教室を開いているという地域があり、林業が少し元気になってきているという報告もされているが、気仙地域ではそういうことはしているのか。

佐々木>できあがった製材が地元の住宅に使われるようにする流れができており、地元の住宅会社や小規模の工務店が合同出資するように、組合に参加するようなくみになっている。

伊藤>出資はそうだが、実際に商品をつくる人たちに向けてのスクールのようなものがあると、林業の再生に効果があるとする報告もされているので、そういったところを調査するのもよいのではないかと。

佐々木>ありがとうございます。

冬木>伊藤先生の発言で思い出したが、家の造り方やデザインも含めて、景観形成として街づくりをしている例として一番行きやすいのでは金山などがあるので参考にしてみてもどうか。

